退職記念講義記録

ウェルズ恵子先生最終講義　教員代表挨拶

坂　下　史　子

本日は対面とZoomで多数お集まりいただき、どうもありがとうございました。国際コミュニケーション（国コミ）学域の教員を代表して、ご挨拶をさせていただきます。

ウェルズ恵子先生は、2020年度からスタートした国コミ学域と、その前身である国コミ専攻を、いずれも立ち上げから牽引してくださったベテランの先生方の最後のおひとりです。本日、先生の最終講義を拝聴し、「ついにこの日が来てしまった。長いあいだ私たちを引っ張ってきて下さった先生方が、これでひとりもいなくなってしまった」と痛感し、かなり淋しく感じています。

今回、先生の最終講義にあわせ、大学生協ブックセンター「ふらっと」において、先生のご著書と関連書籍を展示した記念ブックフェア「ヴァナキュラー文化の世界」を開催しました。このブックフェアにお祝いの言葉を寄せてくださった前駐日ジャマイカ大使のリカルド・アリコックさんが、メッセージの中でウェルズ先生のことを「treasure of Kyoto」（京都の宝）と形容されています。

「いくらなんでも、それは言い過ぎじゃね？」と最初は思ったのですが、でもよく考えてみると、実は先生のことをうまく言い当てているのかなと納得しました。それはなぜか？と言えば、まず何よりも、ウェルズ先生は私たち教員にとって尊敬する同僚であり、本当に頼れる先輩のひとりでした。私の研究室はウェルズ先生の隣なのですが、2014年に着任して以来、困った事など相談があるとき、腹が立ったとき、辛かったとき、嬉しいことがあったとき、そして別に何も用はないけれど、ただお顔を見たいとき、何度先生の研究室のドアをノックしたか分かりません。

また、先ほどのウェルズゼミ卒業生のスライドからも明らかなように、先生は学部生たちにとって素晴らしい恩師でした。そして、ウェルズ先生から薫陶を受け、先生を慕っているのは学部生だけではありません。ブックフェアでは文学研究科英語圏文化専修の在籍院生と修了生のみなさんに、先生のご著書の推薦文をお願いしたのですが、直前の依頼にもかかわらず全員が快諾してくださり、仕事や論文執筆などで忙しい中、ひとりひとりが心のこもった推薦文を寄せてくれました。

さらに、これが一番重要だと思うのですが、先生は私たちの思いつきのような（普通なら少し眉をしかめるような）アイデアも「それいいじゃ～ん！」と面白がってくださり、時には「もっとこうしたら？」などと、私たちの想像のはるか上を行くような無茶ぶりをしてくださる、懐の深い企画宴会部長でもありました。また、国コミのハロウィン・イベントで黒猫の仮装をしたり、学生とクリスマスキャロルを歌って学内を練り歩いたりと、声の文化やヴァナキュラー文化を実践するチャーミングな研究者でもありました。これほどツインテールの似合う60代を、私はこれまで見たことがありません。

このような稀有な「京都の宝」に巡り会えたこと、そして同僚として時間を過ごす中で苦楽を共にさせていただいたこと、その僥倖に、私たち教員は感謝の気持ちでいっぱいです。ウェルズ先生、これまで本当にありがとうございました。そしてこれからも、国コミを末永く、愛情深く見守っていただければ嬉しいです。今後ともどうぞよろしくお願いします。